

## Contents

- 1 大学博物館等協議会 2015 年度大会・第 10 回博物科学会開催報告  
金沢大学資料館長 奥野正幸
- 3 ヴァーチャル・ミュージアムの現状と目指すもの ～金沢大学を例として～  
金沢大学附属図書館長 古畑徹
- 4 秋田大学鉱業博物館における資源学教育展開 ～バーチャル鉱山実習システムの開発と活用～  
秋田大学国際資源学研究科 教授 安達毅
- 6 早稲田大学演劇博物館デジタル・アーカイブの現状  
早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 館長 岡室美奈子
- 7 京都工芸繊維大学美術工芸資料館の活動報告  
京都工芸繊維大学美術工芸資料館 館長 並木誠士
- 9 これからの広島大学総合博物館 ―設立後 10 年を経て  
広島大学総合博物館長 岡橋秀典

## 大学博物館等協議会 2015 年度 大会・第 10 回博物科学会開催報告

金沢大学資料館長 奥野正幸

大学博物館等協議会 2015 年度大会及び第 10 回博物科学会が 2015 年 6 月 25 日（木）・26 日（金）に、金沢大学で開催された。参加館数は 26 館で出席者数は 107 名（ゲストスピーカーを含む）であった。

初日午後から開催された大学博物館等協議会は、山崎光悦金沢大学長の挨拶に始まり、引き続き協議会シンポジウム・パネルディスカッションと館長会議・実務者会議・協議会総会ならびに博物科学会総会が開催された。

協議会シンポジウムは「ヴァーチャル・ミュージ

アの現状と目指すもの」と題して、大会実行委員長（奥野正幸金沢大学資料館長）の趣旨説明、及び 1 件の特別講演と 2 件の招待講演ならびに国立文化財機構事務局長の栗原祐司様から ICOM2019 年大会の京都開催決定について報告があった。特別講演は、金沢大学附属図書館長の古畑徹先生から前金沢大学資料館長として「ヴァーチャル・ミュージアムの現状と目指すもの ～金沢大学を例として～」と題し、金沢大学でのヴァーチャル・ミュージアムの展開と現状ならびに問題点と今後の方向性についての報告があった。続いて、秋田大学国際資源学部教授の安達毅先生から、非常にユニークなヴァーチャル



協議会開会の挨拶



シンポジウム・特別講演



シンポジウム・質疑応答



懇親会の様子



博物科学会口頭発表



ミュージアム・ツアーの様子

鉦山実習システムについての報告があった。2件目の講演は、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長の岡室美奈子先生から、演劇博物館の素晴らしいデジタル・アーカイブと課題について報告があった。講演終了後、パネルディスカッションが開催され、今後のさまざまな問題点について、フロアを含めて意見交換が行われた。

館長会議と実務者会議に引き続き、協議会総会と博物科学総会が開催された。特に、実務者会議では例年にない活発な協議が行われた。本シンポジウムでは、様々なヴァーチャル・ミュージアムの形と今後の問題点が紹介されるとともにそれについてのディスカッションがなされ、参加館のヴァーチャル・ミュージアムへの取り組みの参考になったものと確信する。

総会終了後、金沢大学キャンパスが見渡せるレストラン「すみれ亭」にて懇親会が開催された。なごやかな雰囲気の中かで有意義な意見交換が行われていた。次年度開催校である広島大学総合博物館の岡橋秀典館長からの挨拶をもってお開きとなった。

2日目は、会場を変えて博物科学会の研究発表が行われ、昼食を挟んで15件の口頭発表があった。今回の講演は、デジタル・アーカイブや博物館を通した教育などについてだけでなく、非常

にバラエティーに富んだ発表が行われ、多様な博物館活動を実感することができた。ポスターは初日から掲示され、15件の発表があった。この他に各館の紹介ポスターも同時に掲示された。ポスター会場のファカルティー・ホールには金沢大学資料館等の歴史的な物理機器などの展示も行われた。博物科学会終了後、金沢大学資料館のガイドツアーが開催され、多数の参加者があった。金沢大学の特徴である歴史的資料の展示に、参加者は足を止めて熱心に見学していた。ツアー終了後、午後4時過ぎに散会となった。

以上のように、金沢大学での大学博物館等協議会と博物科学会は盛会のうちに無事終了することが出来た。シンポジウム講演者はじめ参加者の皆様、及び関係者各位のご協力に心より感謝申し上げます。

なお、今回のシンポジウムの内容は、協議会のご協力のもとに、金沢大学資料館紀要第11号に掲載させていただいた。紀要は、追って「金沢大学学術情報リポジトリKURA」に掲載される予定であるので、金沢大学資料館紀要のサイト ([http://museum.kanazawa-u.ac.jp/?page\\_id=26](http://museum.kanazawa-u.ac.jp/?page_id=26)) を通じてご覧いただけることを申し添えておく。

## ヴァーチャル・ミュージアムの 現状と目指すもの ～金沢大学を例として～

金沢大学附属図書館長 古畑 徹

### はじめに

私は、現在（2015年）附属図書館長だが、2年前までは資料館長であった。資料館長に就任した2009年に始まったのが資料館のヴァーチャル・ミュージアム・プロジェクトである。現在7年目に突入し、今年（2015年）3月現在で12コレクション・1004点の学術資料を公開している。

検索サイトで「ヴァーチャル・ミュージアム」（以下、VMと略称）と入れると、さまざまなタイプが出てくる。共通項は仮想展示機能があることだが、似た名称にデジタル・ミュージアム、デジタル・アーカイブスがあり、電子図書館も類似のものに入る。強調する側面や経緯によって用語が異なるのである。また、図書館のなかには貴重資料のレポジトリを持っているところがあり、それともオーバーラップする。

これらの位置付けを明確にするため、横軸に[調査・研究成果／研究者向け←→発信・宣伝・紹介／一般向け]、縦軸に[アミューズメント←→アーカイブス]という座標を設定して分類してみた。金大資料館VMプロジェクトは、アミューズメントと研究の融合を意識していることもあり、さまざまなタイプと部分的に重なる。それでも傾向としては、研究的側面とアーカイブスの側面の方が強く、それを座標に置くと図のようになる。こうなるのには理由がある。

### 金沢大学資料館の概要と歩み

本資料館は、移転に際して設置された「資料館検討小委員会」の基本構想を受けて、1989年に開館した。目的は移転による貴重資料の散逸を防ぐことで、将来的には大学博物館への発展が構想されていた。1999年には金沢大学の開学50年史編纂が行われたが、終了後に集めた貴重な史料を資料館が引き取ることとなり、そこから文書館的機能も付加されることになった。

当初は資料整理だけで手一杯で、展示室の開館はほとんどしていない。常時開館は10年以上経った2000年以降である。2005年が一つの転機

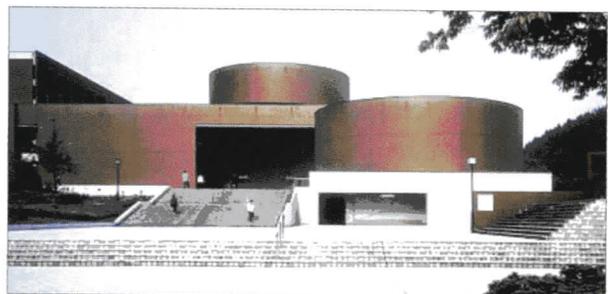


で、展示会・講演会・図録の発行などが定例化し、2008年には『資料館だより』もリニューアルした。私が館長になったのはこうした時期で、若干無理をしても積極的にアピールする方針を立て、入館者数にも目標を設定し、当時の年間3000人を大幅に上回る5000人とした。積極的な展開は功を奏し、学内外で存在感を高め、入館者数も2010年には5000人を、2014年には6000人も突破した。VMもこの積極策の一環として、学内の競争的資金獲得を目指してスタートした。

### 初期の金大資料館VM構想

当初の構想で強調した点は3つあった。1つ目は所蔵データベース機能が、所蔵品が増える一方でスタッフ・予算が少なく、整理が追い付かず目録も作れないという現状の打開策として有効とした点、2つ目は仮想展示が、法人化後の国立大学で重視されつつあった社会貢献・情報発信に有効とした点、3つ目は、研究開発しながら構築するとして大学博物館らしさを示せるとした点である。

採択には成功したが、大学側の期待はデータベース機能よりも情報発信にあった。それでも当初構想でデータベース部分が大きかったことが、金大資料館VMを今のような性格付けにしたものと考えられる。

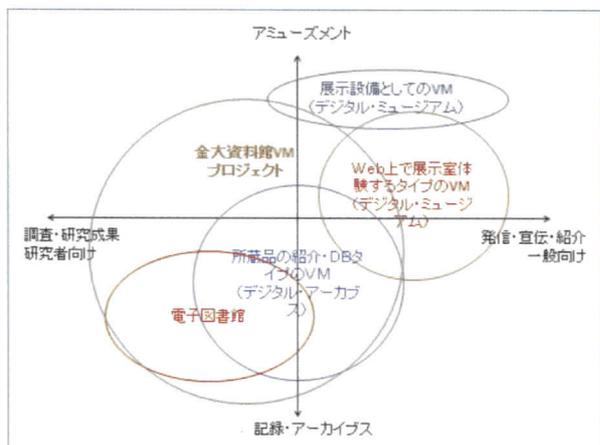


金沢大学資料館外観

金大資料館VMの展開と目指すもの

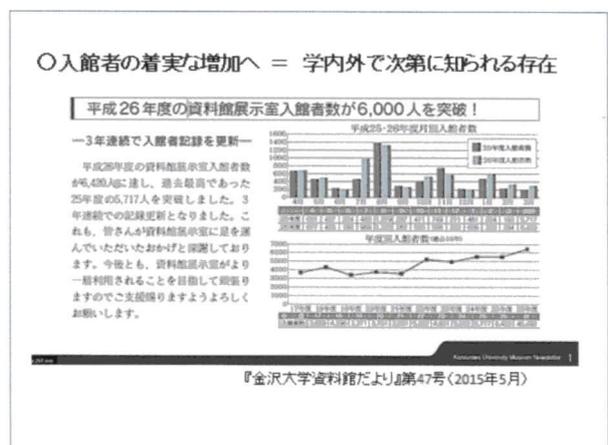
金大資料館VMは、当初から画像1枚ではあまり意味がないとして、6つの違う角度からの画像と高精細画像の掲載を決めた。ついで、メタデータ形式が検討され、Dublin Coreをベースに日本語でどのように作るかを確定した。その後、図書館貴重資料のデジタル化の構想と合体することになり、次第に全学的な非文献リポジトリ、全学的なVMという方向に発展していった。

一方、金大資料館VMでの研究成果を背景に、これを推進したメンバーが中心になって「大学の枠組を超えた非文献資料のための機関横断的なりポジトリ」を目指す非文献資料リポジトリ研究会が発足し、それはさらに2014年に一般社団法人学術資源リポジトリ協議会に発展した。



今後、オープンサイエンスの流れ、及びそれに対応するオープンデータの流れは急速に加速すると思われる。その対象には理系の実験データだけでなく、人文系の史料・古文書・古典籍、研究で使われた絵画・写真・地図なども入るとされる。VMには、これらを掲載するデータリポジトリの役割を果たせる可能性があり、この点も視野に今後のあり方を検討する必要がある。

また、今までは情報発信は地域貢献とセットの傾向にあったが、オープンデータの時代になると、VMも研究に関心のある世界の人々に対しての発信という性格が強まると考えられる。とすれば、VMのメタデータ等の英語化は必須となるはずで、今後を見据えてこの問題にも取り組む必要がある。



秋田大学鉱業博物館における資源学教育展開 ～バーチャル鉱山実習システムの開発と活用～

秋田大学 国際資源学研究科 教授 安達 毅

秋田大学は1911年の秋田鉱山専門学校の設立を一つの起点としており、100年を超える資源に関する教育研究の歴史を有している。現在の鉱業博物館の形になったのはおよそ50年前である(図1)。国内屈指の鉱物・鉱石・岩石の展示や鉱山模型、資源開発機械などの展示を行う、ユニークな博物館として知られている。館内の展示品としては、鉱

物・鉱石に関して約2,200点、岩石200点、化石400点、鉱業関連200点など、地球資源に関する日本一の量と質の展示を誇っている。その他、精力的に外部への発信を試みており、定期的に市民講座の開講や特別展示企画を催している。

今回ご紹介するのは、2014年4月に新たに設立した国際資源学部の立ち上げに合わせて導入された「バーチャル鉱山実習システム」である。このシステムは博物館の講堂内に、幅8メートル高さ3メートルの大型スクリーンを導入し、室内にいな



【図1】秋田大学国際資源学研究所付属 鉱業博物館の外観

れまでも鉱業博物館内の展示物を通じた資源関連の教育活動を行ってきたが、教育効果をさらに高めるために本システムの導入が企画された。館内では、同様のCGの一部を用いて、大型ディスプレイと3Dメガネによる3D映像も楽しめるような展示も行っている。

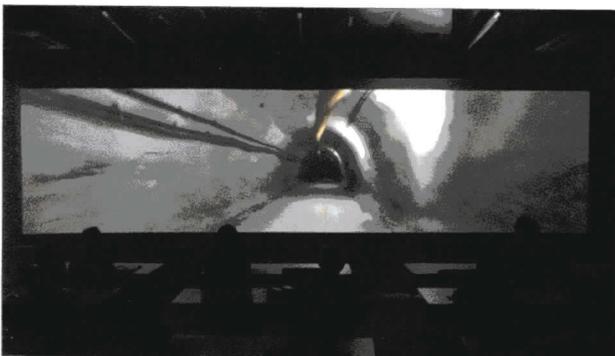
収録されているのは、国内の坑内掘金属鉱山、坑内掘石炭鉱山、露天掘石灰石鉱山の3鉱山である。3Dのデジタルデータ化された鉱山の内部、外部の映像では、解説のナレーションにしたがって動画が再生される自動再生機能を持っている。解説では各鉱山の採掘方法の特徴を説明し、どのような鉱石をどのように採掘するかを理解できるようなシステムになっている。またコントローラーによるインタラクティブ操作が可能であり、トンネル（坑道）内や採掘現場をあたかも自分が歩いているように操作できるようになっている。

坑内掘鉱山とは、有用金属を含む鉱床に向かって地下のトンネルでアプローチして鉱石を採掘する方法をとる鉱山のことである。実際の鉱山

では坑道内部に入ると周囲の様子がわからなくなるのに対して、バーチャル鉱山では坑道のみを俯瞰した映像でとらえることができるので、入り組んだトンネルの様子と鉱山全体の構造を把握できる長所がある。また、詳細な鉱山機械の映像化によって、採掘重機・機械をあらゆる方向から映し出すことも可能であり、機械の特徴や役割についても解説することができる（図3）。露天掘鉱山の映像では空中からの視点で俯瞰し、鉱山の規模や採掘方法について知識が得られるようにした。

日本における資源学教育の最も大きな欠点は、国内で稼働している鉱山がごく少数しか残っておらず、実際の鉱山を訪れる機会を設けることが難しいことにある。大学新入生の段階では、鉱山の姿を想像すらでない状態の学生を受け入れることになる。百聞は一見にしかず、との言葉があるように、鉱山とは何かを知るには一見することで多くを学ぶことがある。このギャップを埋めるための手段の一つとして、本実習システムの意味があると考えられる。また、我が国の鉱山の内部をデジタル・アーカイブ化する意味も込められているのではと考える。

国際資源学部の学生には初年次に本システムを利用することで、現在の鉱山開発がどのようなものを疑似体験させ、その後の資源に対する興味と学習意欲の向上を目指している。また、鉱山・鉱業への理解を広げてもらうために鉱業博物館では一般の入場者にも随時、本システムを公開している。



【図2】バーチャル鉱山実習システムの上映の様子



【図3】坑内掘採掘現場のCG映像

## 早稲田大学演劇博物館デジタル・アーカイブの現状

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館  
館長 岡室美奈子

### 演劇博物館の概要

坪内博士記念演劇博物館（通称エンパク）は、1928年（昭和3年）の創立以来、アジアで唯一の演劇・映像専門総合博物館として、古今東西の演劇映像資料を収集してきた。現在では100万点に及ぶ多種多様な収蔵品を有する。内容は、錦絵（浮世絵）が約4万6800枚、舞台写真が40万枚、演劇、映像関係の図書が25万5000冊、チラシ・プログラムなどの演劇上演資料が約8万点、衣装・人形・書簡・原稿などの博物資料が15万9000点、ほかに貴重書・視聴覚資料などがある。

博物資料をさらに詳しく言えば、紙媒体では、歌舞伎台帳、浄瑠璃本、古書、図書、雑誌、台本、脚本、自筆原稿、草稿、チラシ、ポスター、写真、書簡、日記、電報、広報誌、切り抜き、メモ、設計図、舞台装置図などがある。上演関係では、衣装、靴、装身具、小道具、仮面、模型、人形、鏡台など。映像・音源は、SP・LPレコード、カセットテープ、CD、VHS、8mm、DVDなど多岐にわたる資料を収蔵している。

小さな博物館ではあるが、この中に世界の演劇の歴史が凝縮されていると言える。1987年にはエリザベス朝時代のフォーチュン座を模した博物館の建物が新宿区の有形文化財に指定された。

### 演劇情報総合データベース設立の経緯

演劇博物館は演劇情報総合データベース「デジタル・アーカイブ・コレクション」をネット上で展



早稲田大学演劇博物館（エンパク）

開している。演劇博物館はデータベース構築が比較的早かった。1989年に、収蔵品管理データベースの構築に着手したが、当時は光ディスク電子画像ファイリングシステムを使っていた。それが飛躍的に変化したのが2000年代で、2001年は演劇博物館のデジタル・アーカイブ元年とも言える。その大きな要因は、科学研究費研究成果公開促進費（データベース科研）に採択されたことにあり、ここから公開に踏み切っていく。特に2010年度から5年間は、同科研費の重点データベースとして採択されて飛躍的にデータの量も増え、今は総計52万件に及ぶデータを公開している。

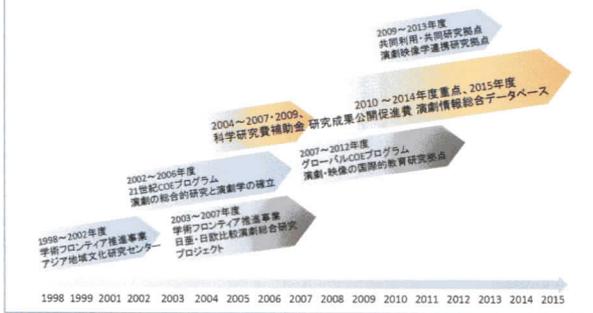
さらに前館長時代の2002年度から2006年度までは21世紀COEプログラム、2007年度から2012年度までグローバルCOEプログラムという二つのCOE事業に採択され、演劇博物館自体が国際的な教育研究拠点として発展した。デジタル・アーカイブも、データベース科研だけではなく、COE事業と連動して充実したと言える。

### デジタル・アーカイブの実績

2014年度のアクセス数が2756万8643件で、前年比17%増となっている。特に当館の目玉である浮世絵データベースには1547万5800件もアクセスがあり、これは24%増となっている。この浮世絵データベースは、登録データ数が4万7571件と世界有数のコレクションであり、もともと海外からのアクセスも非常に多かったが、研究者向けに作られていたため、必ずしも使い勝手はよくなかった。そこでデジタル・アーキビストと相談し、インターフェースの改善をした。アクセス数が増えたのは、一般の方にも使い易くなったことが大きいと考えている。

2014年度にはまた、デジタル・アーキビストの提案で3Dデータベース構築に着手した。データ公開数はまだ109件で、浮世絵などと比べると全く桁が違って少ないように見えるが、アーキビストによればネット上で公開されている3Dデータ数としては国内最大で、世界でも有数であるとのこと。演劇博物館の3Dデータベースは、今のところ仮面類のみだが、たとえば能面の角度を変えることで表情の違いを楽しむことができる。加えて、光源の位置や背景の色や明暗を自分で変更することができるため、様々な鑑賞環境を再現できるところが大きな特徴となっている。3Dデータを公

## 公的資金と 演劇博物館デジタルアーカイブ室のあゆみ



開しており、PDFファイルでダウンロードできるところも新機軸である。

3Dデータベースの可能性としては、3Dプリンターによる復元ができるという点が挙げられる。もちろん復元に関しては著作権など様々な問題はありますが、レプリカの作成や教育的利用、特に災害で資料が喪失または破損しても、3Dデータがあればある程度復元できるという利点がある。

他のデジタル・アーカイブ・コレクションとして

は、浄瑠璃本や歌舞伎の番付のデジタル・データなど古典芸能の研究者の方々にとってはお馴染みの資料に加えて、たとえば国内外の数千点の幻燈スライドがデジタル化されている。また、故・杉村春子氏の全ての台本がデジタル化されているが、著作権の関係で館内閲覧のみとなっている。杉村氏の台本の特徴は、書き込みが非常に多く、この書き込みを見ることで、杉村氏の思考とともに、劇作家の言葉にどう反応したかという息遣いや身体のあり方が伝わってくる。そういう意味で書き込み台本は非常に重要である。そのほかにも様々な資料がデジタル化されているので、ぜひエンパクHPのデジタル・アーカイブを覗いてみていただきたい。

著作権処理や多言語対応など取り組むべき課題も多いが、積極的に新しい技術も導入しつつ、デジタル・アーカイブ・コレクションをますます充実・発展させたいと考えているので、他の博物館と情報交換・情報共有を行っていききたいと思う。

## 京都工芸繊維大学美術工芸資料館 の活動報告

京都工芸繊維大学美術工芸資料館  
館長 並木誠士

京都工芸繊維大学美術工芸資料館は、京都工芸繊維大学学内共同利用の教育研究施設として1980（昭和55）年に設立されました。翌81年6月に建物が竣工し、同年10月3日に開館しました。本館の所蔵する美術工芸資料は、本学の前身校の一つである京都高等工芸学校の創立以来の収集品が基盤となっています。

京都高等工芸学校は1902（明治35）年に創立され、初代校長は化学者であり美術工芸に造詣の深かった中澤岩太、創設時の教授陣には洋画家の浅井忠、建築家の武田五一が加わっていました。ヨーロッパにおける新しいデザインの動向を展望し、はじめて本格的なデザイン教育が開始されることになったのです。浅井、武田はヨーロッパにおいて、アール・ヌーヴォー期のポスターや陶磁器類などデザイン教育のための教材収集もおこないました。



美術工芸資料館外観

美術工芸資料館の収蔵品は、現在約42,000点、その分野は絵画、ポスター、彫刻、金工、漆工、陶磁器、染織資料、建築図面、考古品など多岐にわたっています。そのなかでも浅井忠が最晩年に描いた「武士山狩図」（油画）は、宮内省の命により、当時の東宮御所の壁飾綴織の原画として制作されたもので、1907年の第一回文部省美術展覧会にも出品されました。本館には、このための習作やモデルとして使用された武具なども残されており、制作過程の一端を知ることができます。また、浅井や武田らが描いた図案や、それをもとに当時の京都の若手作家たちが制作した蒔絵や陶磁器



美術工芸資料館内観



七福神蒔絵菓子器（浅井忠図案、迎田秋悦製作）

などの工芸品も、本学や京都の美術工芸界の歴史を語るうえで重要な作品です。

開館以来積極的に収集を続けているポスターコレクションは、近代ポスターの父といわれるジュール・シュレやロートレックなどの、グラフィック・デザインの歴史に残る貴重なポスターを軸に、第一次世界大戦期の欧米ポスターやポーランドなど東欧の映画や展覧会ポスター、もちろん、赤玉ポートワインや東京オリンピックのポスターといった我が国のデザイン史を飾る貴重なポスターも数多く含んでおり、国内有数の規模と内容を誇っています。

さらに、1995（平成7）年には建築家村野藤吾の建築図面の寄贈を受け、その調査、研究を進めるとともに、授業の一環として学生に図面から模型を製作させ、毎年、研究成果とともに公開をしています。また、2010年には、詩人谷川俊太郎氏から1920年代～70年代のラジオ190台余の寄贈を受けました。素材やしきみといった科学的な要素とデザイン性をあわせもつラジオは、「科学と芸術の出会い」という本学の教育方針を体現しており、谷川氏の希望もあって、学生が普段利用する附属図書館に常設展示されています。2013年には、型絵染作家中堂憲一の染色作品が下絵や型紙、スケッチブックなど創作工程を浮かび上がらせる資料とともに寄贈されるなど、コレクションは毎年充実度を増しています。

なおこうした収蔵品は、年間6～8回程度の企画展示を通じ、一般に広く公開しています。あわせて、学内外の新人作家の継続的な成長支援を目的とする「未来の途中」プロジェクトの実施や学内教員による作品展、学芸員資格取得をめざす博物館実習受講生による企画展なども定期的で開催し、幅広い活動を続けています。

館外での活動としては、2011年度より文化庁の助成を受け、本館が幹事校となって京都市内の14の大学ミュージアムが相互協力することを目的とした「京都・大学ミュージアム連携」をたちあげました。現在もさまざまな事業を共同してすすめています。

京都・大学ミュージアム連携所属館を巡るスタンプラリーでは、ユニークなミュージアムグッズがもらえることもあって、地元のシニア世代を中心に多くの方に参加いただき、恒例イベントとして定着しつつあります。これを機に大学ミュージアムの存在を知ったという方も多く、地域住民と大学の壁を低くする役割を果たしています。また、2012年に14大学ミュージアムを総動員し、京都大学総合博物館で開催した「大学は宝箱！—京の大学ミュージアム収蔵品展」では、国宝や重要文化財を含む各大学の歴史や特性を表すさまざまな文化遺産が公開され、地域の方々に驚きを与えました。同展では、所属館の学生たちに展示作業への参加やギャラリートークの実施を呼びかけ、学生たちもまた貴重な体験を得ることができました。これを皮切りに、2013年には九州産業大学美術館、2014年には東北歴史博物館、2015年には沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館において、出張展覧会を実施し、京都の文化遺産の多様性を地方に発信するとともに、地域を越えた大学ミュージアムの交流を続けています。

また、2015年度には文化庁から「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」のグラフィック・デザイン分野を受託し、武蔵野美術大学、文化学園大学と協力して、日本国内に所蔵されているデザイン関係資料をデジタル・アーカイブ化し、それら資料の利活用のための基盤づくりに励んでいます。

## これからの広島大学総合博物館 — 設立後10年を経て

広島大学総合博物館長 岡橋秀典

広島大学総合博物館は平成18(2006)年4月1日に発足し、同年11月から本館常設展示を開始した。この度めでたく設立10周年を迎え、さらに本館への入館者数も本年5月に10万人を達成した。この大きな区切りとなる年に、大学博物館等協議会の全国大会を開催できるのはまことにありがたく、また幸せなことである。大学博物館等協議会での様々な刺激と励ましがなければ、今の本博物館はなかったと言っても良い。多くの博物館が夢をもって前進しておられるのを見聞することが我々に希望と勇気を与えてくれたと思う。そこで、この機会に、明日の本博物館について、展望しておきたい。

昨年末に「明日の大学博物館と広島大学」をテーマに、10周年記念シンポジウムを開催した(写真)。基調講演に、京都大学総合博物館の前館長の大野照文先生をお招きし、「開かれた総合博物館とは— 人類の進化の視点から考える」という壮大かつ夢のある基調講演をいただき、その後、「広島大学総合博物館— 地域に開かれた博物館をめざして」についてパネルディスカッションを行った。ここでキーワードとなった「開かれた博物館」が今後の本博物館の展望にも大きく関わってくると思われる。

本博物館は設立時から「キャンパスまるごとミュージアム」と「地域重視の博物館」という二つの方向を意識して運営してきた。前者では、博物館を本館に限定せず、キャンパス全体に博物館的機能をもたせた。エコミュージアムの考え方により、キャンパス全体に広がる博物館活動を展開することにより、キャンパス、さらには大学内に広く開かれた博物館を実現することができた。後者の地域重視は、主に展示の中で具体化するように留意した。常設展示では里山、里海を主要な柱とし、企画展でも、大学の研究紹介の一方で、地域志向の宮島、瀬戸内海、

里山といったテーマを意識的に取り上げた。

こうした中で「地域に開かれた博物館」への挑戦は開館以来続けてきたが、結果は必ずしも芳しくなかった。この経緯については、博物館研究51-3(2016年)の拙稿に記したので再論しないが、大学側から一方的に「地域に光を当てる」方法には限界があり、多様な戦略が必要であることを痛感させられた。それは、地域の特別天然記念物オオサンショウウオの生息調査と保全活動を通じて、博物館を中心に学生、地域住民、地域団体、東広島市を巻き込む形で協働の輪が広がっていった最近の経験によるところが大きい。

このことから、本博物館が真に「地域に開かれた博物館」となるには、地域から来館者を集め、地域に関わる展示を行い、出前展示もする、というだけでは不十分と言うことになる。さらに、地域全体を博物館と見立てたエコミュージアムの展開や、地域のコーディネーターとしての活動も求められるのではないか。このような方向は緒についたばかりであるが、昨年度既に、文部科学省の地(知)の拠点整備事業により、ICタグを用いたエコミュージアムの展開を学内外で試行したところである。写真2は、その試みを紹介した講演会のポスターである。

今後は、本博物館の他業務を行いながら、このような「地域に開かれた博物館」をめざす方向も意識的に追求していくことが課題となろう。今話題の地方創生も、様々な状況変化に対応できるレジリエントな(回復力のある)地域を形成することが真の目標となるはずである。そのためには、地域に愛着をもち、地域の記憶を掘り起こし、地域を深く理解するプロセスが必須である。大学博物館はこのような点にもっと貢献できると考える。



賀茂台地エコミュージアムを提起した講演会のポスター



総合博物館10周年記念シンポジウムの基調講演

## 大学博物館等協議会加盟館の活動状況

## 北海道大学総合博物館

北海道大学総合博物館リニューアルオープン  
2016年7月26日(火)

夏の企画展「ランの王国」  
2016年8月5日(金)～9月25日(日)  
北海道大学総合博物館1階企画展示室

## 東京藝術大学美術館

藝大コレクション展 ー春の名品選ー  
2016年4月2日(土)～5月8日(日)  
東京藝術大学大学美術館本館

美術学部三田村有純教授退任展 (仮称)  
2016年10月25日(火)～11月6日(日)(予定)  
東京藝術大学大学美術館本館

いま、被災地から  
ー岩手・宮城・福島の美術と震災復興ー  
2016年5月17日(火)～6月26日(日)  
東京藝術大学大学美術館本館

東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展  
2016年12月13日(火)～12月23日(金)(予定)  
東京藝術大学大学美術館本館

観音の里の祈りとくらし展Ⅱ  
ーびわ湖・長浜のホトケたちー  
2016年7月5日(火)～8月7日(日)  
東京藝術大学大学美術館本館

美術学部坂口寛敏教授退任展 (仮称)  
2017年1月6日(金)～1月19日(木)  
東京藝術大学大学美術館本館

平櫛田中コレクション展  
2016年7月5日(火)～8月7日(日)  
東京藝術大学大学美術館本館

美術学部飯野一朗教授退任展 (仮称)  
2017年1月6日(金)～1月19日(木)  
東京藝術大学大学美術館陳列館

驚きの明治工芸展 (仮称)  
2016年9月7日(水)～10月30日(日)  
東京藝術大学大学美術館本館

美術学部橋本明夫教授退任展 (仮称)  
2017年1月6日(金)～1月19日(木)  
東京藝術大学大学美術館陳列館

台東区コレクション展  
2016年9月17日(土)～10月16日(日)  
東京藝術大学大学美術館本館

東京藝術大学卒業・修了作品展  
2017年1月26日(木)～1月31日(火)  
東京藝術大学大学美術館本館、  
東京藝術大学構内、東京都美術館

## 名古屋大学博物館

すべて名古屋大学博物館展示室にて開催

特別展「モンゴル大百科」  
2016年4月19日(火)～8月27日(土)

企画展  
「誇張なきアート ー科学記録に見る美」  
2016年11月15日(火)～2017年2月24日(金)

企画展  
「全学同窓会台湾支部5周年記念 台湾書道展」  
2016年9月13日(火)～10月29日(土)

特別展  
「コンクリーション ー地球から火星までー」  
2017年3月14日(火)～8月12日(土)

京都工芸繊維大学美術工芸資料館

「複製技術としてのポスター」展  
2016年3月14日(月)～5月7日(土)

産学連携企画

「京都の墨流し染・糊流し染  
—その系譜と新たな可能性—」展  
2016年5月23日(月)～6月11日(土)

第14回村野藤吾建築設計図展

「村野藤吾の建築 模型が語る豊饒な世界」展  
2016年3月14日(月)～6月11日(土)

京都・大学ミュージアム連携展

「学業から職業へ —京都高等工芸学校と  
京都市立美術工芸学校の図案教育Ⅲ」  
2016年6月20日(月)～8月8日(月)

「チェコのグラフィックデザイン  
—ポスターとマッチラベル—」展  
2016年6月20日(月)～8月8日(月)

食とポスター (仮称)  
2016年8月22日(月)～9月24日(土)

SDレビュー京都展 (仮称)  
2016年10月3日(月)～10月22日(土)

建築図面展 (仮称)  
2016年10月3日(月)～10月22日(土)

大阪大学総合学術博物館

すべて大阪大学総合学術博物館待兼山修学館にて開催

第9回特別展

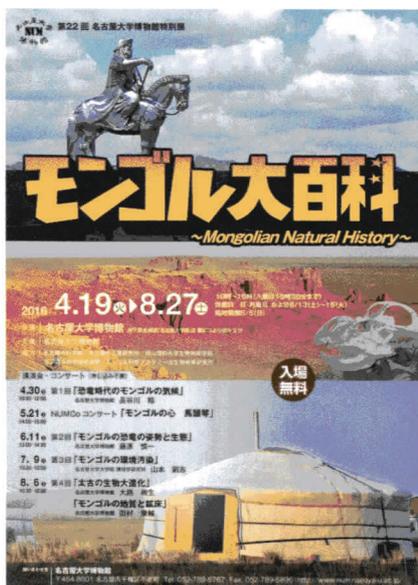
嗚呼黎明は近づけり…友よ我らぞ光よと  
—よみがえる旧制高校 大高・浪高の記憶と記録—  
2016年4月27日(水)～7月9日(土)

第20回企画展

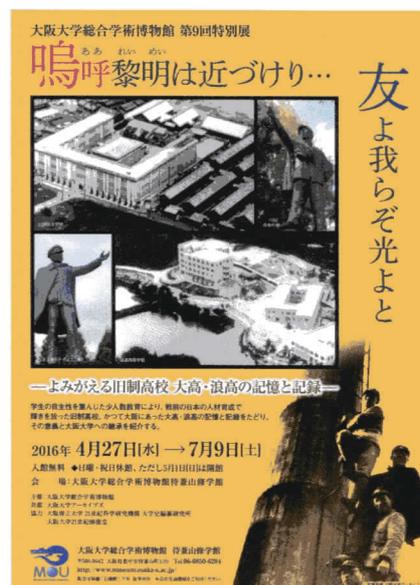
重建懐徳堂開学100周年記念  
「大阪の誇り—懐徳堂の美と学問—」(仮称)  
2016年10月22日(土)～12月22日(木)

2016年度夏期特集展示

科学で楽しむ怪異考 妖怪 古生物展  
2016年7月23日(土)～8月27日(土)



名古屋大学博物館



大阪大学総合学術博物館

MUSEO ACADEMIAE 第18号  
大学博物館等協議会ニューズレター

発行日 2016年6月30日  
発行者 大学博物館等協議会  
編集 大阪大学総合学術博物館 06-6850-6714  
560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-13